In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

一八四〇年代ベルリンの都市社会とファミリエンホイザー

北村 昌史

Citation	西洋史学. vol.175, p.19-37.
Issue Date	1994-12-25
Type	Journal Article
Textversion	Publisher
Rights	この記事は、個人的な目的でのみダウンロードすることができます。 その他の使用には、著者と日本西洋史学会の事前の許可が必要です。 This article may be downloaded for personal use only. Any other use requires prior permission of the author and 'The Japanese Society of Western History'.

Self-Archiving by Author(s)
Placed on: Osaka City University

北村昌史. 一八四〇年代ベルリンの都市社会とファミリエンホイザー. 西洋史学. 1994. Vol.175, p.19-37.

一八四〇年代ベルリンの都市社会とファミリエンホイザー

北村昌史

はじめに

一九世紀になるとドイツの都市人口が増大し、一八四〇年代には都市内の様々な社会問題が市民層に認識されるようになる。[1] そうした問題のなかでも住宅問題はとくに意識され、一八四〇年代から六〇年代にかけて住宅改革運動が展開する。筆者は以前、当時の住宅改革運動をベルリンを中心に分析し、以下の点を明らかにした。[2] 住宅改革者は住宅問題についてその社会・経済上の背景を認識せず、道徳や衛生の問題として捉える。この問題の解決をはかるため市民的な住居（部屋ごとの機能分離・一住居＝一家族）をあたえ、市民の最下層の人を精神的および道徳的に向上させようとする。そのために上の階層の援助も求められた。こうした認識の枠組みから、市民層と貧しい者が一緒に住み、前者が後者によい影響をあたえるという発想（「混合居住」）が改革者の間で次第に積極的な意味をもつようになる。そして、以上の構想の根底にL・ガルが初期自由主義の理想社会像とする「無階級市民社会」の理念がみられる。この理念はすべての社会層を市民に変えることで作りだされる市民だけの均質な社会をいう。[3]

さて、当時の住宅改革運動で悪住環境の象徴となったのはファミリエンホイザーという労働者のための集合住宅である。この建物は、ベルリンの北、ハンブルク門を市内から外に出てすぐそばにあった。ベルリン市民はこの建物をベルリンの普通の都市社会とはちがう空間であり、道徳的にも衛生的にも危険と認識した。極端な場合、建物自体は「殺人者の巣」「伝染病の家」とよばれ、住民は「ならず者」と考えられた。居住習慣については「一部屋に一つの家族より多くが住む」と認識し、そのために性道徳の乱れが生じると考えた。[4]

このようなイメージが出発点となって先の構想が作りだされたのは確認するまでもあるまい。住宅改革者はこうした問題を自分たちのなじんだ住環境をより多くの人にあたえることで解決しようとし、また

「混合居住」という発想も下層民だけが約二千人、こうしたイメージの建物に住むことへの反発といえる。したがって、ファミリエンホイザーについてのイメージがどの程度現実を反映していたのかという問題は当時の住宅改革運動、さらにはその根底にある「無階級市民社会」という当時の社会改革者に広くみられた発想[5]の実効性に関わるものであろう。

しかし、この問題への解答を一九八〇年代からすすめられている住宅改革研究に求めても、十分な答は返ってこない。それは近年の研究が次のような視角を共有しているためである。その視角というのは、一九世紀の住宅改革運動を第一次世界大戦後に基盤が確立する、当局の積極的な関与による住宅建設体制（「社会的住宅建設」）成立史として叙述するものである。この視角のために従来の研究では一九世紀の住宅改革運動の「社会的住宅建設」につながる要素だけが強調され、運動の時代ごとの社会的背景や固有の論理は捨象されてしまう傾向にある[6]。たとえば、先にのべた世紀中葉の住宅改革運動の特質は明らかにされてこなかった。こうした従来の視角では、一八四〇年代に住宅改革運動がはじまった背景としては人口の増大により悲惨な労働者住宅が生じ、それに対処するため改革がおこなわれたと指摘されるにとどまる[7]。そこでは、当時の市民が住宅問題をどう認識したか、その認識が現実をどの程度反映していたか、そしてそれをもとに改革者がどのような構想をいだいたかは十分に考察されていない[8]。

以上のような従来の研究への批判を念頭におきつつ、本稿は先の問題に解答をあたえるため、まずスイス人教育学者H・グルンホルツァーのファミリエンホイザー探訪記[9]（一八四三年）に分析を加えたい。その結果、否定的なイメージとは異なるファミリエンホイザー像が浮かびあがってくる。そして、その分析結果と他のベルリン市民によるファミリエンホイザー叙述を比較、対照する。とくにドロンケの『ベルリン』を詳しく分析し、探訪記が当時の市民層にどう読まれたかを明らかにする。この分析から当時の市民層の思考様式が抽出可能となろう。そうした意味で、本稿は以前はその「弱さ」が強調され、近年再検討がすすむドイツ「市民」層[10]の思考様式を探る試みの一つといえる。

本稿で用いる史料はガイストとキュルファースによる史料集[11]（一九八〇年）に依拠する。これはファミリエンホイザーに関する史料を収集し、それらにコメントや若干の分析を加えた半史料集・半研究書ともいうべき性格をもつ。ただ、彼らの収集した豊富な史料については十分な利用価値があるが、彼らの分析は本稿でも示すように不十分な点が多い。

そして、都市問題として生じた住宅問題を考える場合、都市化という現象を考慮にいれる必要がある。都市化とは一九世紀に都市人口が急増するにともない都市社会が大きく変化する過程をいう。都市化研究の共通認識をまとめているとおもわれるロイレケの著作は、この都市化の過程を①準備期（一八世紀末―一八四〇年代）、②始動期（一八五〇年代―七〇年代）、③本格化の時期（一八七〇年代―第一次世界大戦）に時期区分する[12]。筆者は、以前、労働諸階級福祉中央協会の機関誌を用いて、先にのべた世紀中葉の構想が、都市化による都市社

会の変化にともない変遷したことを明らかにした。つまり、都市化が本格化した世紀転換期頃の改革構想をみると、都市計画の枠組みで語られ、また労働者の住居の sweet home としての役割が強調されるようになる。[13] こうした構想の変遷につれ改革者の労働者住宅認識も変化することが予想されるが、本稿は都市化の準備期における労働者住宅認識を確認することがその課題である。

註

(1) 川越修『ベルリン 王都の近代 ――初期工業化・一八四八年革命』ミネルヴァ書房、一九八八年。

(2) 拙稿「一九世紀中葉ドイツの住宅改革運動」『西洋史学』一六六、一九九二年。(以下「住宅改革運動」)。

(3) Lothar Gall, Liberalismus und "bürgerliche Gesellschaft". Zu Charakter und Entwicklung der liberalen Bewegung in Deutschland, in: *Historische Zeitschrift*, 220, 1975.

(4) 本稿第三章および第四章、前掲拙稿「住宅改革運動」参照。

(5) 前掲拙稿「住宅改革運動」および拙稿「ドイツ三月革命前後の労働諸階級福祉中央協会」『史林』七三―三、一九九〇年。

(6) Nicholas Bullock, The movement for housing reform in Germany 1840-1914, in: id. and J. Read, *The Movement for Housing Reform in Germany and France 1840-1914*, Cambridge 1985; Juan Rodrí guez-Lorez/Gerhard Fehl (Hg.), *Die Kleinwohnungsfrage. Zu den Ursprüngen des sozialen Wohnungsbaus in Europa*, Hamburg 1987; Clemens Zimmermann, *Von der Wohnungsfrage zur Wohnungspolitik. Die Reformbewegung in Deutschland 1845-1914*, Göttingen 1991.

(7) Zimmermann, *a.a.O.*, S.21-27; Bullock, op.cit., p.17-25.

(8) 構想は前掲拙稿「住宅改革運動」参照。

(9) Heinrich Grunholzer, Erfahrungen eines jungen Schweizers im Voigtlande, in:Bettina von Arnim, *Dies Buch gehört dem König*, Berlin 1843. この採訪記の写真版が Johann Friedrich Geist und Klaus Kürvers, *Das Berliner Mietshaus 1740-1862*, München 1980, S.9-25 に収録。(以下 G.u.K., *a.a.O.*)。

(10) Jürgen Kocka (Hg.), *Bürgertum im 19. Jahrhundert. Deutschland in europäischen Vergleich*, München 1988 など。

(11) G.u.K., *a.a.O.*

(12) Jürgen Reulecke, *Geschichte der Urbanisierung in Deutschland*, Frankfurt am Main 1985, S.9.

(13) 拙稿「一九世紀ドイツにおける住宅改革構想の変遷 ――労働諸階級福祉中央協会の機関誌を題材に」『史林』七六―六、一九九三年。

一 ファミリエンホイザー Familienhäuser

当時のベルリンの住宅事情やファミリエンホイザーについてふれておこう。

ベルリンの一八四〇年代は人口増加に住居供給が追いつかなくなりつつあった時期といえる。一八三〇年に市全体で二四七、五〇〇人が五〇、二四五の住居に住んでいた。四〇年には人口が三二二、六二六人と増大し、住居数は五九、二七一となる。一住居あたりの住人数を計算すると、三〇年には四・九三人であったのが、四〇年には五・四四人と約一割上昇している。五〇年には七八、三三八住居に四一八、七三三人が住み、一住居あたりの住人数は五・三五人と若干低下する。[1] こうした状況のなか、労働者のかなりの部分は居住環境の劣悪な裏家や半地下住居に住まざるをえない。[2] さらに部屋を又貸ししたり、

Schlafburschen（労働者家族の住む部屋にベッドだけを借りる人）をおく習慣があり、労働者の住居には家族以外の人も一緒に寝起きしていた。[3] こうした習慣が一九世紀の住宅改革運動でとくに問題になる。他方、市民層の住居は、一住居に一家族だけが住み、また居間、寝室、台所などの部屋ごとの機能分離が確立し、労働者の住居とは状況が異なる。[4]

以上の住宅事情のなか、ファミリエンホイザーはフォークトラントとよばれる市壁の北にひろがる地域に建てられた。一八世紀中葉以降、砂地であったこの地域に傷病兵収容施設や死刑執行場が設けられた。この地域は当時のベルリン市民からは「泥棒の隠れ家」とみられ、ここにファミリエンホイザーについてのイメージの源泉を求めることもできよう。一九世紀になるとボルジッヒの機械工場が設立され、この地域は工業地域の性格をもつようになる。機械工業地域としての性格は、この地域に四〇年代にシュテッティン鉄道とハンブルク鉄道の終着駅が設けられるとさらに強まる。また工場で働く労働者用住居の建設がこの地域で盛んにおこなわれた。[5]

このフォークトラントの一番市内よりの場所に侍従H・O・v・ヴュルクニッツ H.O. von Wülcknitz が一八二〇年から二四年にかけて四つの大きな労働者用賃貸住宅と小規模の建物をいくつか建てた。それらの建物すべてがファミリエンホイザーとよばれた。四つの賃貸住宅は、「Kaufmannshaus」、「Langeshaus」、「Querhaus」、そして「Schulhaus」という。小規模な建物は家畜小屋や車庫だが、「kleines Haus」とよばれる建物だけは賃貸用である。これらの建物のうち一番規模の大きい Langeshaus は、高さ一八・四〇メートル、奥行き一五・八五メートル、幅六三メートルある。半地下や屋根裏を含め実質五階のこの建物では各階を中廊下が貫き、その両脇に一五部屋ずつ並ぶ。したがって、各階三〇部屋、建物全体で一五〇部屋ある。部屋一つが一家族用の住居であり、住人はその部屋を生活の場としてのみならず、仕事場としても用いる。また、kleines Haus には二〇住居あるが、それぞれ居間と台所が分かれており、当時の市民層の住居に近い。[6]

では、人口増大にともない出現したこれらの建物が当時のベルリンの住宅のなかで占める位置をおさえておこう。ファミリエンホイザー建築後の一八二八年、市全体で七、三〇〇家屋に五一、八一七の住居があり、[7] 一家屋あたりの住居数は七・一となる。各住居の大きさを度外視すれば、一五〇住居ある Langeshaus はベルリンの平均的な家屋の二〇倍強の住居をそのなかに納めていたことになる。具体的な軒数は不明だが、ベルリンには他にもこの程度の規模の家屋があり、[8] ファミリエンホイザーが当時のベルリン唯一の大規模集合住宅であったわけではない。ただ、当時のベルリンではかなりの規模の建物が四つ集まり、四〇〇世帯、二、一九〇人が住む[9]ファミリエンホイザーは、一九世紀前半では特異な存在であったはずである。

住人の職業をグルンホルツァーが訪れる約五ケ月前の家賃未払い人リスト（一八四二年一一月二日）のデータ[10]からみてみよう。所有者が作成したこのリストには、家賃を滞納している二九八世帯の世帯主の職業が記されている。それによれば世帯主の職業では家内労働者がいちばん多く、一九一人（六四・〇九％）である。なかでも織工が一三

二人（四四・三〇％）と最大の集団である。当時のベルリンの工業で最大の就労者数をもつ繊維工業は問屋制のもと家内労働者によって担われており[11]、ファミリエンホイザー住民の大部分はその繊維工業を底辺で支えた労働者といえる。他方、日雇いと労働者も四一人（一三・七六％）と比較的多いものの、織工に比べると少ない。こうしてみると、ファミリエンホイザーは、機械工場に地理的に近いが、その労働者の住居という性格はそれほどなく、「機織り工場」というべきものである。これに加え、独身女性が六二人（二〇・八一％）と多いことも特徴であろう。ほかに営業従事者と廃疾者が二人ずつ（〇・六七％）いる。

彼らの払う家賃は、Langeshaus・Schulhaus・Querhaus についての所有者の報告[12]をみると、年二〇から二六ターラーの間に設定されていた。当時のベルリンの家賃の平均は一〇〇ターラー前後[13]、また年間家賃三〇ターラー以下の住居は市全体の住居の一八・六九％という数字[14]を考えると、この家賃は当時のベルリンの最低レベルといえる。また、市民層の住居に近い形の kleines Haus の家賃は年三〇から三六ターラーと若干高めである[15]。

註

(1) Günter Liebchen, Zu den Lebensbedingungen der unteren Schichten im Berlin des Vormärz. Eine Betrachtung an Hand von Mietpreisentwicklung und Wohnverhältnissen, in: Otto Büsch (Hg.), *Untersuchungen zur Geschichte der frühen Industrialisierung vornehmlich im Wirtschaftsraum Berlin/Brandenburg*, Berlin 1971, S.309.

(2) G.u.K., *a.a.O.*, S.512.

(3) Liebchen, a.a.O., S.281f.

(4) Joachim Petsch, *Eigenheim und gute Stube. Zur Geschichte des bürgerlichen Wohnens; Städtbau-Architektur-Einrichtungsstile*, Köln 1989, S.30-39.

(5) G.u.K., *a.a.O.*, S.28-75; S.110-123; S.170-191.

(6) *Ebenda*, S.76-94; S.124-149; S.97-108.

(7) *Ebenda*, S.145.

(8) *Ebenda*, S.83-91.

(9) *Ebenda*, S.276.

(10) *Ebenda*.

(11) Ingrid Thienel, *Städtewachstum im Industrialisierungsprozess des 19. Jahrhunderts. Das Berliner Beispiel*, Berlin/New York 1973, S.253f.

(12) G.u.K., *a.a.O.*, S.278.

(13) Liebchen, a.a.O., S.310.

(14) 川越前掲書、四八頁。

(15) G.u.K., *a.a.O.*, S.167.

二　グルンホルツァーの探訪記の分析

一八四〇年代になるとファミリエンホイザーに対するベルリン市民の関心が高まる状況が整ってくる。まず、フォークトラントに鉄道の終着駅が二つ設けられたためファミリエンホイザーのそばのハンブルク門の交通量が増大した[1]。市民がこの建物を眼にする機会が増えたのだが、これに加え当時新聞や雑誌の影響力が拡大しつつあり、ファミリエンホイザーに関する記事がのるようになる[2]。こうしてファミリエンホイザーへの注目が集まりつつあった一八四三年七月、ベルリンの社交界の中心人物の一人であるベッティーナ・フォン・アルニムの

『国王に捧げる書』が出版された。この本は彼女と親交があり、四〇年に即位した国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世への意見書である。この本の付録がグルンホルツァーのファミリエンホイザー探訪記である。四二年一〇月から一〇ケ月ベルリン大学に留学していたグルンホルツァーは、四三年の三月末からの約一ケ月で一四回ファミリエンホイザーを訪れた。そこでおこなった三三世帯の住民へのインタビューをまとめたのがこの探訪記である。(3)

この探訪記を分析するさいの留意点として三点あげておこう。第一に、グルンホルツァーは体系的な調査をおこなったわけではなく、見落としや書き落としが考えられる。第二に、一般の市民層とはちがい彼は労働者に道徳面の危険をみることはなく、住民の状況にも同情や理解を示す。ただ、労働者の人間関係のよさを賞賛する態度がみられる点は注意を要する。(4) 最後に、彼はスイスの小工業都市バウマの中等学校で労働者の子弟を教えていた。(5) 彼は教育の専門家であり、またこの経験から労働者への理解が生じたのであろう。

さらに、グルンホルツァーは自分の調査対象が住民の平均と主張するが、(6) ガイストらの研究も指摘するように(7)この主張は認めてもよい。たとえば、世帯主の職業構成は前章で分析した家賃未払い人リストでは織工が一番大きな集団であり、それに独身女性と日雇い・労働者が続く。その傾向は探訪記でとりあげられた世帯主の「自称の職業」(表)でも同じである。織工が一五人であり、独身女性の六人と日雇いや労働者の四人が織工に続く。

ガイストらも探訪記を中心に他の史料もまじえ住民の状況の再現を

世帯主の職業

自称の職業：実際の職業	ページ	自称の職業：実際の職業	ページ
1. きこり：労働不能	S.537f.	18. 商品の運搬	S.568f.
2. 織工：失業	S.538f.	19. 鋳造（労働者）	S.569-571
3. 織工／織工（雇い人）	S.539f.	20. 骨と紙屑集め	S.571f.
4. 織工	S.540f.	21. 織工：切屑片付け or 材木集め	S.572f.
5. 家具職人：失業	S.541f.	22. 日雇い	S.573
6. 靴職人	S.542-545	23. 家具職人：日雇い	S.573-575
7. 寡婦＋糸巻：失業／織工：失業	S.545-549	24. 靴下織り	S.575-577
8. 傷痍軍人：玩具つくり	S.549-551	25. 寡婦＋洗濯と床掃除	S.577f.
9. 仕立屋	S.551-555	26. 織工：労働不能	S.578f.
10. ガラス職人	S.555-558	27. 織工：エプロンの紐作り	S.579f.
11. 織工：労働不能	S.558f.	28. 労働者：乞食	S.580f.
12. 寡婦＋糸巻き	S.559f.	29. 織工	S.581
13. 織工	S.560f.	30. 織工：失業	S.582
14. 織工：糸巻き	S.562f.	31. 失業	S.582f.
15. 寡婦＋骨拾い	S.563f.	32. ネッカチーフ織り（織工）	S.583f.
16. 寡婦＋糸巻き	S.564-566	33. 洗濯女（夫は機械工）	S.584f.
17. 織工	S.566-568		

／＝2世帯同居の場合の世帯の境界
2つの職業を分けていない場合は両方合致。

試みているが、[8] 本稿では探訪記が市民層にどう読まれたかという関心から探訪記のみに分析を加える。

まず世帯構成をみると、当時の労働者の慣習であり、市民から問題視された又貸しや Schlafburschen はない。夫や妻が亡くなった世帯が多い（寡婦五人・やもめ三人）。[9] そして、こどもは一二歳前後での独立が期待される。[10]

次に、表は世帯主の職業をまとめたものである。「自称の職業」をみると織工が一五人と半数近くを占め、また寡婦、妻、こどもの重要な収入源として機織りの準備作業である糸巻きの作業がある。[11] それで、ファミリエンホイザーは「機織り工場」の様相を帯びる。住民はベルリンの産業を底辺で支えた労働者といえる。住人には手工業的職種を営む者や手に職をもたない者もいる。どのような職業でも住民の生計は不安定である。「自称の職業」と「実際の職業」の食い違いが示すように、本来の職業につけなかったり、失業中の者がいる。彼らは収入が減ると衣服や家具を売ったり、質にいれたりして裸同然となる。[12] 食事を減らし、[13] さらに家賃を滞納する。[14] 月に二ターラー前後の家賃の滞納がひどくなった住民は所有者によってファミリエンホイザーから追いだされる。[16] 市内の住居の家賃が払えなくて引っ越してきた者が多かったので、[17] 追いだされた住民は路上に住まざるをえない。[18]

そうした住民が人間関係を密にして生活していた。[19] また、ベルリン市民が「市民社会の構成員」を増やすために救貧学校や礼拝時間といった改革事業をおこなうが、[20] 住民はそうした事業に市民が意図したようには対応しない。[21] 学校については、教育の専門家であるグルンホルツァーは質問と答の機械的な反復に終始するその教育内容に批判的である。[22]

以上の探訪記の分析結果もグルンホルツァーの眼を通してみた一つの「イメージ」にすぎない。ただ、第一章の家賃未払い人リストの分析と同様、探訪記の分析からもファミリエンホイザーの「機織り工場」としての姿が浮かびあがった。家賃も月二ターラー前後（年二四ターラー）と記されることが多く、それは年一〇から二六ターラーとする所有者の報告と符合する。次に確認するが、ファミリエンホイザーでは又貸しの類は禁止され、そうした習慣はみられなかったが、探訪記にも記載はない。したがって、探訪記は完全な客観的史料とはいえないが、グルンホルツァーがファミリエンホイザーの実態をある程度的確にとらえていたとみてさしつかえない。以上の分析結果がファミリエンホイザーの否定的なイメージと異なるのはことさら強調するまでもあるまい。探訪記の叙述のうち否定的なイメージと関わる点をここで改めて分析し、両者のずれをおさえておく。

まず、当時の市民層から問題視された又貸しや Schlafburschen の習慣についてであるが、否定的なイメージではそうした習慣がファミリエンホイザーで存在したことが強調される。ところが、そうした習慣は探訪記には記載されていない。また、三〇年代以降おこなわれた住民調査でもほとんど報告されていない。[23] これは一八二八年に警視庁がだしたファミリエンホイザーについての指令でこうした習慣が禁止されたことによる。その後住民の入退去は警視庁の監視のもとにあった。[24] 探訪記をみると血縁関係にない者の同居は二例のみであり、それ

らも家計を同じくしており、又貸しではない。第一の例は独身の織工が世帯主の住居で、彼は雇い入れた子連れのやもめと生活と仕事をともにしている。[25] 二つ目は独身の織工と糸巻きを職業とする寡婦が同棲している所帯で、彼らは実質的に夫婦である。[26]

次に、否定的なイメージではファミリエンホイザーは道徳的に問題があるとされ、極端な場合住民を常習的な犯罪者としてしまう。探訪記にはその類の記載はないが、住民の人間関係の良さを賞賛するグルンホルツァーの態度のため道徳的な問題がはっきり書かれなかったにすぎないという可能性もある。ただ、探訪記の分析から住民の多数はベルリンの産業を底辺で支えつつ、ぎりぎりの状態で不安定な生活を送る人々であるという結果をえた。これは常習的な犯罪者からはほど遠い。また、探訪記には住民が警察の厄介になっている状況がしばしばでてくる。これも、生活苦から乞食をしたため警察に拘禁されたり、[27] 容貌が警官の注意をひきやすいといったものであり、[28] 否定的なイメージとは様相が異なる。

最後に、ファミリエンホイザーが衛生上問題ありとするのも否定的なイメージの特徴である。探訪記に三三世帯・一三四人記されているうち一七世帯に二六人とかなりの病人が記載されている。[29] グルンホルツァーは病気を逐一記さなかった可能性もあり、実際には病人の数はこれより多かったとおもわれる。こうしてみると否定的なイメージと探訪記の記述が合致しているようだが、探訪記の記述をよく読むと実はそういえない。彼らの病気は、腸チフスのような伝染病もあるものの、ほとんどがてんかん、脱腸などの慢性的な病や労働不能となる怪我である。[30] 当時の市民層が衛生上問題があるとする時、それは「伝染病の家」としてである。[31] 病気が多いといっても、そうしたイメージとはちがい慢性的なものであるのは強調しておかなければならない。

以上、探訪記をよむと否定的なものとは異なるファミリエンホイザーの「イメージ」をえることができるわけである。

註

(1) G.u.K., *a.a.O.*, S.188-191.
(2) *Ebenda*, S.200; W.Ribbe (Hg.), *Geschichte Berlins*, München 1987, S.590.
(3) G.u.K., *a.a.O.*, S.214-217. 以下、グルンホルツァーがインタビューした世帯については、探訪記の記載順に世帯に番号をつけ、その番号で引用箇所を示す。世帯の番号とその探訪記の該当頁は表参照。
(4) Grunholzer, a.a.O., 7; S.592-594.
(5) G.u.K., *a.a.O.*, S.218.
(6) Grunholzer, a.a.O., S.585.
(7) G.u.K., *a.a.O.*, S.276.
(8) *Ebenda*, S.272-323.
(9) Grunholzer, a.a.O., 3; 7; 12; 15; 16; 19; 25; 27.
(10) Ebenda, 9; 11; 12; 14; 25; 27; 29.
(11) Ebenda, 2; 7; 12; 13; 16.
(12) Ebenda, 2; 6; 7; 9; 14; 22; 23; 30.
(13) Ebenda, 13; 16; 18; 20; 25.
(14) Ebenda, 2; 6; 10; 11; 13; 14; 17; 21; 23; 30; 32; 33.
(15) Ebenda, 1; 3; 4; 7; 9; 18; 26.
(16) Ebenda, 2; 13 ; 33.
(17) Ebenda, 1; 2; 6; 9; 13.
(18) Ebenda, 13; 33.

(19) Ebenda, 6; 7; 9; 10; 17; 31; 33.
(20) G.u.K., *a.a.*O., S.372-388.
(21) Grunholzer, a.a.O., S.585-692.
(22) Ebenda, S.585-587.
(23) G.u.K., *a.a.*O., S.164-166.
(24) *Ebenda*, S.140.
(25) Grunholzer, a.a.O.,3.
(26) Ebenda, 7.
(27) Ebenda, 7; 27; 29.
(28) Ebenda, 17.
(29) Ebenda, 1; 2; 5; 8-13; 18; 20; 22; 23; 26; 27; 30; 31.
(30) Ebenda, 23.
(31) Ebenda, 1; 2; 8-10; 13; 19; 23; 26; 27; 30; 31.

三　グルンホルツァー探訪記発行以前

三章と四章では、ガイストらの史料集に収録されている当時の新聞、雑誌、小説[1]がファミリエンホイザーとその周辺のフォークトラントをどのようにあつかっているのかを、探訪記の分析結果と対比しつつ整理する。新聞や雑誌の記事は全文が収録され、小説などについてはファミリエンホイザーを叙述した部分の完全な抜粋である。ガイストらの研究はこれらの史料のうち探訪記発行以降のものの一部を、誇張した史料[2]と、ベルリンの社会構造に正確に位置づけた史料（ザスやドロンケの記述[3]）の二つに分ける。ただ、彼らのこの分類はきちんとした史料の分析に基づいておらず、史料を細かく分析すると彼らの分類とはちがった結論をえることができる。また、収録された史料の多くは分析が加えられておらず[4]、それらの史料も含め改めてガイストらの研究に収録されている史料を分析しよう。

まず、探訪記発行以前の史料をみていこう。

ファミリエンホイザーは一八二〇年代に建てられてから三〇年代半ばまで市当局や警視庁の論議の対象となる。そうした状況は稿を改めて論じる予定だが、この建物に対するこれらの行政機構の認識は次のようにまとめられる。市当局と警視庁はファミリエンホイザーのように一ケ所に労働者が集まる建物の道徳、衛生、防犯上の危険性を強く認識する。また、市当局や警視庁は Schlafburschen や又貸しを非難し、その結果一八二八年にこれらの慣習はファミリエンホイザーでは禁止される。すでに市の行政機構レベルでは建築直後から一八四〇年代に市民層に根強くみられるようになるイメージでとらえられていた。これに加え、救貧負担の増大に悩む市当局にはファミリエンホイザーの存在は認めがたかった。つまり、そこに集まる住民の多くは貧困を理由に市民税である家賃税の支払が免除されるのだが、彼らはまた救貧扶助を求めて市に負担をかけかねなかった[5]。

一八三〇年代までは市の行政機構や一部の市民のみがファミリエンホイザーに関心をもったにすぎないが、一八四〇年代になるとこの建物に関する記事が新聞や雑誌にのるようになり、状況は変わる。

ファミリエンホイザーが新聞や雑誌ではじめてとりあげられたのは、ガイストらの研究によると『若き世代』である。共産主義者ヴァイトリンクが一八四二年一月に『ドイツ青年の救いを呼ぶ声』を改称して、創刊したこの雑誌は、一八四三年五月の彼の逮捕まで出版された。千

部印刷され、うち四百部がフランス、百部がロンドンと発行部数のかなりが外国に送られた。[6] この雑誌の一八四二年八月号の Korrespondenz と題する匿名の記事にファミリエンホイザーがとりあげられている。[7] ガイストらの研究は著者を青年ドイツ派に属するK・グツコと推定する。[8]

父親の家がハンブルク門から遠からぬ場所にあったという著者は、家の近くにベルリンの軽蔑に値する不名誉が二つあったとのべる。死刑執行場とファミリエンホイザーである。ファミリエンホイザーは理性的な社会秩序からはなれてしまい、人間や市民の家族の住居というよりも殺人者の巣である。悪魔が各部屋の仕切りにおり、血の気がなく、やせ衰え、そしてじゃがいも酒やザウアークラウトで腫れあがった住民がならんで寝ている。さらに、ファミリエンホイザーを「伝染病の家」と表現し、「きちんとした身なりの人は夜にここへゆけない」という。住民については、宗教戦争が発生した場合に敵はこの建物から徴集されるといい、一般の市民とは異なった価値観をもった存在としてとらえられている。以上の悲惨な状態の原因は人間の権利の不均衡にあり、唯一の救済手段は全体を犠牲にして個人に有利にするような私的所有権を変革することである。

ここではグルンホルツァーの探訪記とは異質なファミリエンホイザーのイメージが語られている。グルンホルツァーとちがい住民に同情をもっていないようにおもわれるこの記事の筆者にとっては、ファミリエンホイザーは犯罪者や病気の巣窟であり、普通の人が容易に近づきえない場所である。それで、彼はファミリエンホイザーが「軽蔑に値する不名誉」であることを強調する。この文章は否定的な認識のもっともはっきり現れた例といえる。この記事は同年九月三〇日の『ライン新聞』にもほぼ原文どおり掲載されている。[9]

次にファミリエンホイザーをとりあげたのは一八四二年一一月一七日のベルリンの地方新聞『駅伝』である。ここでは、ジャーナリストJ・H・ベータが記事を書いている。[10]

ベータは凍えて動けなくなった青年を辻馬車で送って、「ベルリンのあらゆる悲惨さがすべての道路や路地から集まった」ファミリエンホイザーにいった。二、一九〇人の住人はベッド、机、木材（燃料）、衣類、ストッキング、靴、仕事、金、じゃがいも、見込み、慰め、同情といった普通の市民や労働者がもてるものをもてず、ボロ服、麦わら（布団）、汚れ、有害動物、飢えをもつ。ベータが送った青年は一一人のこどもをもつ織工であり、家族全員がボロを着、麦わらをかぶって寝る。月一〇から一二ターラー以上は稼げず、机の替わりの丸太と織機をおいた部屋の家賃に年三六ターラー払わなければならない。妻はストッキングや靴がないため外にでられず、こどもは凍死しないために一日中部屋にいる。部屋の隅にチョークで線がひいてあり、そこは別の夫婦に二〇ジルバーグロッシェンで又貸ししている。ファミリエンホイザーの住民は、市内では家賃が払えず、家主から家具やまあまあの状態の衣装を差し押さえられたうえで住居から放りだされた家族、市のもっとも貧しい者（骨・ぼろ拾いや住民のなかではもっとも豊かなきこり）、そして出所してきた受刑者やあらゆる種類の泥棒やごろつきである。以上のようにのべたうえでベータは自助こそがこう

した状況からの救済を可能にすると主張して報告をしめくくる。

先に分析した『若き世代』の記事と比べると住民に同情的である。この点でベータはグルンホルツァーと立場を同じくする。また、住民が裸同然の状態であるとか、市内に住めなくて引っ越してきたといった、探訪記にも記されていた状況が語られている。ベータが送った青年が家内労働に従事する織工であるのは、住民の職業構成を考えるとありそうな話である。本当にいったかどうかは別にして、彼が確かな情報源をもとにファミリエンホイザーを叙述した可能性はある。にもかかわらず、部屋の空間の又貸しが指摘され、住民に「あらゆる種類の泥棒やごろつき」がいるとのべるなどグルンホルツァーの探訪記の叙述とはずれる点もみられる。

発行部数のかなりが外国に送られた『若き世代』とちがい、ベルリンの地方新聞である『駅伝』に掲載されたこの記事にベルリンの住民から反応がある。二ケ月後の一二月二九日、当時のベルリンの二大新聞の一つ『フォス新聞』が、この記事に対する匿名の反論を掲載した。[11] ガイストらは著者を地区の救貧委員会の委員長と推定する。[12] この匿名氏はファミリエンホイザーの内部の状況を長年にわたって正確に把握してきたという。彼は『駅伝』の記事はまるでみてきたかのように書いているが、それは疑わしいと主張する。

まず、チョークの線で数家族が部屋を分けているという長年広まっている根拠のない、悪意に満ちた報告が蒸し返されていると指摘する。前章でみたように当時のファミリエンホイザーには部屋の空間の又貸しはない。この点、匿名氏は状況を的確に捉えている。また探訪記からえられるイメージとも合致する。

次に、彼はベータが送ったという青年の存在も疑問視する。三六ターラーの家賃を払い、一一人のこどもをもち、又借り人を受けいれた青年はファミリエンホイザーにはいないというのである。この指摘に続けて匿名氏はファミリエンホイザーの状況を次のようにいう。四〇〇ある住居の家賃は二〇ターラー、二四ターラー、そして三〇ターラーである。二、五〇〇人以上の住人の大部分がもっとも貧しい状態、つまり食料、衣服、寝床なしで生活している。こうした状況の住民の間に生活必需品の価格上昇のなか、貧窮が増大している。

家賃について当時の所有者は kleines Haus は三〇から三六ターラー、他の大規模な建物は二〇から二六ターラーと報告している。ベータの記事が正しいとすれば、青年の払う家賃はファミリエンホイザーでも一番上の部類であり、kleines Haus の家賃に相当する。だが、第一章でのべたように、kleines Haus の住居は台所と居間が分かれているが、『駅伝』の記事では青年の住居は単数で Zimmer と記されるのみで、台所の存在はのべられていない。見落としも考えられるが、住居の状況からは青年の部屋は大規模な建物にある可能性が高い。ベータの記事は家賃と部屋の状況の間に矛盾が生じている。それに対して、匿名氏のあげる数字は所有者の報告とほぼ同じである。

さらに、匿名氏は貧困のさいの意気消沈を不潔やふしだらと取りちがえてはいけないという。泥棒やごろつき、そしてとくに出所した受刑者が新しい住民として受けいれられるというのも嘘であると主張する。前章でみたように住民には警察の厄介になる者もいたが、彼らは

泥棒やごろつきと一緒にあつかわれる常習的な犯罪者ではない。こうした点でも、グルンホルツァーの認識と匿名氏のは同じであり、ベータの認識はずれている。

最後に再び又貸しがとりあげられ、彼は又貸しがファミリエンホイザーでは禁止されていることを警視庁で聞いてくることをベータに望む。第二章でのべたように、又貸しは一八二八年に禁止され、その後住民の入退去は警視庁の監視のもとにあったのだが、匿名氏はそうした状況を心得ていたのであろう。

前章まででのべたことから判断すると匿名氏はファミリエンホイザーの状況を知っていたといえる。さらに、彼はグルンホルツァーに近いファミリエンホイザー・イメージをもっていた。他方、ベータの記事は、グルンホルツァーに立場が近いように見えるが、マイナスのイメージが顔をだしてしまっている。

ベータは一八四三年九月一六日に再反論を『駅伝』に掲載する。[13] 探訪記出版後の史料だが、話の脈絡からここでとりあげる。この記事を分析すると、両者の議論には微妙なずれがみられる。匿名氏はベータの記事が現実にないことを書いていると主張しているにすぎない。その記事の内容をベータはファミリエンホイザーの状況が自分の記事でのべられているほど悪くないと主張しているのだと理解している。又貸しや犯罪者の居住がないというのはベータにとっては状況が悪くないということに等しいのである。いいかえると、彼は劣悪な住環境ならば、こうした状況が必然的に生じると考えている。しかも、彼はこの記事でグルンホルツァーの探訪記に言及し、[14] 三日後の九月一九日の『駅伝』では探訪記がとりあげた世帯のうち五例を紹介しており、[15] 彼が実際に探訪記を読んだのは疑いをいれない。さらに、彼は探訪記の記述が自分の主張を裏付けていると考えている。探訪記をきちんと読めば、自分の記事よりも匿名氏の記事のほうが探訪記の記述に近いことはわかるはずだが、彼の認識は改まっていない。ここに彼の思い込みの強さがうかがえよう。

以上、グルンホルツァーの探訪記発行以前の市民層によるファミリエンホイザー叙述は、完全に探訪記とずれたイメージを語る史料、探訪記と共通の認識をもつ史料、そして一見探訪記と立場を同じくしつつ、いくつかの点でずれをみせる史料の三つに分類できる。

では、章を改めて探訪記発行以降のファミリエンホイザーに関する記述を分析しよう。

註

(1) G.u.K., *a.a.O.*, S.200-271. ガイストらの史料集の収録頁は括弧内に注記。
(2) *Ebenda*, S.250-259.
(3) *Ebenda*, S.259-263.
(4) *Ebenda*, S.200-213; S.264-271.
(5) *Ebenda*, S.124-169.
(6) *Ebenda*, S.201.
(7) Anonym, Correspondenz, in: *Die junge Generation*, Berlin 21. 8. 1842. (G.u.K., *a.a.O.*, S.201-203.)
(8) G.u.K., *a.a.O.*, S.204.
(9) *Ebenda*, S.204-208.

(10) β, Die Berliner Familienhäuser, in: *Die Stafette*, Berlin, Nr.136, 17. 11. 1842. (G.u.K., *a.a.O.*, S.208f.)
(11) Anonym, Die Berliner Familienhäuser, in: *Vossische Zeitung*, Berlin, Nr.304, 29. 12. 1842. (G.u.K., *a.a.O.*, S.210f.)
(12) G.u.K., *a.a.O.*, S.209f.
(13) β, Hand-und Maschinenarbeit/Aus Berlin, in: *Die Stafette*, Berlin, Nr.110, 16. 9. 1843. (G.u.K., *a.a.O.*, S.211.)
(14) Ebenda.
(15) β, Bettina in den Berliner Familien=Häuser, in: *Die Stafette*, Berlin, Nr.111, 19. 9. 1843. (G.u.K., *a.a.O.*, S.211-213.)

四　グルンホルツァー探訪記発行以後

まず、発行部数不明の『国王に捧げる書』とその付録の探訪記への反響を確認しよう。この書物への書評が全部でいくつでたかはわからないが、ベッティーナ・フォン・アルニムが収集した書評は一六ある。また、『国王に捧げる書』をうけて書物が二冊出版された。一冊はA・シュタールの『ベッティーナと彼女の国王に捧げる書』である。これは『国王に捧げる書』への好意的な書評であり、本の内容をまとめたものといえる。もう一冊がLeberecht Frommと称する人物の『「国王に捧げる書」という本の破廉恥さ』である。この本の著者は民主的文筆家・歴史家A・シュトレックフスであり、彼は『国王に捧げる書』に共産主義という幽霊を感じる。そして、同年九月三〇日、フランクフルトにいたオーストリアの密偵は「『国王に捧げる書』が文芸大衆に大きな注目をあびた」と報告している。

他方、『国王に捧げる書』の本来の目的は一八四〇年に即位した国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世への助言であり、出版と同時に国王に進呈された。だが、国王とその側近からはこの書物に好意的な反応が返ってこない。国王は本をもらった時はよろこんだものの、通読したのち本の内容に立腹した。内務大臣フォン・アルニムは八月一七日に上奏文を国王に提出している。彼はこの本の非宗教性と急進主義のゆえに公共にとってもっとも危険な著作の一つであると進言する。こうした状況から、『国王に捧げる書』自体は免れたものの、シュタールとシュトレックフスの著作は両方とも発禁処分をうけた。(1)

このように『国王に捧げる書』とその付録の探訪記は読書人層に大きな反響をえつつ、労働者の生活をあつかったため短絡的に「共産主義」というレッテルが貼られた。

では、探訪記出版後のファミリエンホイザーについての叙述を検討しよう。

まず、ガイストらの研究には書評が二つ収録されている。(2) そのうち一つは先にとりあげたグツコによる書評である。ただ、二つの書評とも『国王に捧げる書』と探訪記の内容の紹介にとどまり、書評者のファミリエンホイザー・イメージは読みとれない。

次に、グルンホルツァーに近い観点に立つ史料をみていこう。『国王に捧げる書』発行から一年後の一八四四年、『ベルリンの秘密』と題する書物が三冊発行された。これらはフランスで出版されたウジューヌ・スーの『パリの秘密』のドイツ語訳の影響のもと書かれた。『パリの秘密』はパリの労働者をあつかった小説である。三冊の『ベルリンの秘密』では『パリの秘密』でとりあげられたパリの労働者地

区サンタントアーヌをフォークトラントに置き換えている。[3] この三冊のうち労働者の悲惨な状況への同情をもちつつ書かれたA・ブラスの『ベルリンの秘密』ではフォークトラントを次のように描く。

まず、建物がフォークトラントほど目立つ色で、そして目を痛めるような塗装がされている地域は市の他の場所にはない。また、この地域の商店はその単純さで首都の他の商店すべてと異なる。フォークトラントの住民は大家族に属しているようなものだが、その大家族は嘆かわしい貧困、消耗性疾患のような悲惨さのなかにいる。そして、フォークトラントを泥棒の滞在の場、集結点とする人は誤解しているという。ブラスはここはすべてを奪いとられた貧者の逃げこむ場所であり、彼らは犯罪者ではないと強調する。[4]

住民を危険視することに異を唱えている点でグルンホルツァーと同じ認識といえる。他にもファミリエンホイザーを家内労働者の織工の仕事場兼住居として描き、犯罪者の巣窟といった捉え方をしない小説も書かれている。[5]

他方、グルンホルツァーのものとは完全にちがうイメージでファミリエンホイザーを叙述する史料もみられる。三冊の『ベルリンの秘密』のうち別の匿名のもの[6]を検討してみよう。この史料ではグルンホルツァーとちがい労働者のおかれた状況への共感はみられず、またとくに探訪記を資料として用いていない。

まず、フォークトラントの中心であるファミリエンホイザーから強奪をおこないかねないならず者の全軍が、毎朝ハンブルク門を通って市内にはいり、ペストのように市全体にひろがるとのべられる。この建物の生活は読者には想像がつかないだろうとしたうえ、以前は部屋の床にチョークで十字に線がひかれ、その四分の一ごとに家族が住んでいたとか、冬になると犬と猫が食料となり、家族全体に汚い、いやな病気がうつるといった逸話が紹介される。この建物では家族のつながりがあしげにされ、人が動物の状態になってしまう。

以前の話と断っているが、部屋の又貸しが語られ、住民には「ならず者」「ペスト」「動物の状態」といったイメージがいだかれ、「いやな病気」がはやるという。ここで描かれているファミリエンホイザーは探訪記のイメージとはちがう。この匿名の『ベルリンの秘密』には他にもフォークトラントやファミリエンホイザーが住民の生業、風習、習慣の点で市の他の部分とちがう、道徳的に問題がある場所であることを強調する箇所がある。[7]

以上、ブラスのものと匿名のものと二つの『ベルリンの秘密』に分析を加えた。探訪記発行後も、グルンホルツァーに近いイメージでファミリエンホイザーを語る史料もあるが、探訪記の叙述とはかなりずれた認識をもつ文章も世にでている。ただ、これらの史料では探訪記からの影響が明らかではない。次に探訪記を確実に読んでファミリエンホイザーを叙述している史料を分析する。この分析から前章でベータについて指摘した否定的なイメージの根強さがまた浮かびあがってこよう。

まず、探訪記の最初の読者は『国王に捧げる書』の著者ベッティーナ・フォン・アルニムであろう。彼女も住民の悲惨な状態に同情し、彼らに対する救済を求めており、グルンホルツァーと立場は同じであ

る。ところが、彼女が探訪記に書いた序文では「十字に引いたチョークを境に又貸しがおこなわれている」とのべられており、[8]彼女にも否定的なイメージと同様の認識がある。ほかに確実に探訪記を読んだうえで、同じ様に又貸しを書いている例として美学教授T・ムントの小説をあげることができる。[9]

さらに、こうした関心からもっとも興味深いのはE・ドロンケの『ベルリン』[10]である。この書物は一八四〇年代のベルリンについて、民衆の生活にはじまり、市民層の経済活動や政治・団体活動、警察制度、さらにプロイセン政府の状況にいたるまで包括的に叙述した社会小説とも、ルポルタージュともいえる作品である。従来から三月革命前のベルリン社会史の史料として活用されてきたこの本は、一八四六年に出版され、すぐ発禁処分となった。[11]このようにファミリエンホイザーについてのイメージの形成や普及へ大きな役割をはたしたとはいえないこの作品を詳しくとりあげるのは、次の理由による。ドロンケはグルンホルツァーの探訪記にほぼ依拠してファミリエンホイザーの状況を叙述しており、実際に探訪記を読み、資料としての価値を認めている。そのさい、彼は労働者に同情的な立場をとり、その点でグルンホルツァーと相通じるものがある。ところが、次に確認するように、ドロンケの叙述は探訪記の記述からずれて否定的なイメージと同じ部分があり、そこからこのイメージが立場のちがいを越えて市民層に広く共有されていたことが確認できるからである。では、「プロレタリアート」と題する章でとりあげられたファミリエンホイザーに関するドロンケの叙述を分析しよう。

まず、プロレタリアートはベルリンの外側にある路地や市区、つまり「悪い地区」にみられる。その主な場所がフォークトラントであり、その中心がファミリエンホイザーである。私的投機によって成立したこの建物の多くの部屋で二家族以上が住み、部屋を横切るロープで二つの家族が分けられる。[12]

ここで注意すべきは、探訪記を読んだドロンケが二世帯以上による一つの部屋の賃借を指摘していることであろう。この慣習は探訪記に記載がなく、他の史料からも存在しないと確認できるのだが、こう書いてしまうことにドロンケの労働者の状況への思い込みがうかがえる。これに加え、フォークトラントやファミリエンホイザーを「悪い地区」の中心というのも否定的なイメージに近い。

さらに、ドロンケは住民が「無所有民衆階級の最後の屑」であり、全員の状態は例外なく救済を必要とするが、市の救貧局は援助をだし渋っているという。そして、グルンホルツァーの探訪記からいく人かの住民の例がのべられ、ファミリエンホイザーには国家の犠牲となった人が住み、そこにはもっとも深い悲惨さがみられると主張する。[13]

以上の点をのべたうえでドロンケは住民の道徳の問題にも言及する。ファミリエンホイザーでは道徳の衰退は自然にすすむ。住民はいっしょくたに住んでいることですべての外的障壁が奪われ、こどもは粗野にそして教育なしに成長する。大部分の親が教育によってこどもが貧困から脱出することを望むが、ファミリエンホイザーの教育の状態は首都全体でもっとも嘆かわしい。[14]

ここの指摘も探訪記とずれる。グルンホルツァーはファミリエンホ

イザーの学校教育を批判しており、この点ではドロンケは探訪記の叙述を素直にうけとっている。しかし、住民の道徳の衰退は探訪記に言及されていない。グルンホルツァーは労働者の人間関係を賞賛しており、そうした観点からは住民の道徳の衰退は叙述の対象とはならない。ただし、ファミリエンホイザーで「道徳の衰退」があったかどうかはここでは問題ではない。ほぼグルンホルツァーの報告に依拠しつつも、そこには書かれていないことを書いてしまうドロンケの認識の枠組みこそが問題なのである。

ドロンケはファミリエンホイザー住民を国家の犠牲者とし、一般の市民よりも労働者に同情的であり、グルンホルツァーに近い立場といえる。しかし、探訪記を否定的なイメージと同様の観点から読み替えてしまう。

労働者に共感をもつが、否定的なイメージを語ってしまうのは、ザスのベルリンに関するルポルタージュ[15]でもみられる。ドロンケの『ベルリン』と同年に出されたこの書物は住宅事情、団体活動、社交などから当時のベルリンを叙述している。ザスが実際に探訪記を読んだかはわからない。ただ、ザスはこの書物でベルリンの社交界の中心人物としてのベッティーナに言及[16]し、さらに一八四三年以降ベルリンに滞在していたので[17]、彼が大きな反響のあった『国王に捧げる書』を知らなかったとはおもえない。この書物の最初の「住宅」という章でファミリエンホイザーがとりあげられている[18]。ザスはこの建物の住民を「宿なしの一歩手前」という。投機目的に建てられたこの建物の住民は、期日までに家賃を払わないと道路に「追いだされる」のである。これはグルンホルツァーの探訪記からえられる情報と同じである。ただ、一部屋にしばしば二家族より多くが住むとのべており、ここに否定的な認識と共通する面がある。また、ファミリエンホイザーの叙述に続けて、宿なし一般について「彼らの大部分はあらゆる種類の犯罪の単なる新兵ではなく、古参兵である」と指摘する。ザスにとってはファミリエンホイザー住民が「宿なしの一歩手前」ならば、彼らは「犯罪者の一歩手前」ともいえる。彼は住民にすくなくとも犯罪者と共通する性質を認めていると考えてさしつかえない。この点でも探訪記の認識とずれる。

ガイストらの研究では、ドロンケとザスはベルリンの社会構造にファミリエンホイザーを正確に位置づけていると評価がなされている[19]。それは、住民についてドロンケが救済を必要とすると指摘し、ザスが「宿なしの一歩手前」とのべている点などでは認めることもできよう。ただ、以上みたように、彼らも探訪記と同様の記述をしているようなのだが、実は否定的なイメージも書き込んでしまっている。彼らの視線にはもともとバイアスがかかっていたわけで、ガイストらの指摘には全面的に賛成しかねる。ガイストらの研究では史料相互の比較という視点が明確でないので、ドロンケとザスの視点のこうしたバイアスを読みとることができなかった。

以上、グルンホルツァーの探訪記の出版後も以前同様、市民によるファミリエンホイザー像は、探訪記とずれた認識を語るもの、探訪記に近いイメージをもつもの、そして一見探訪記と合致するが、いくつかの点でずれているものの三つに分類できる。結局、ファミリエンホ

イザーについての否定的な認識には根強いものがあった。グルンホルツァーと同様労働者に同情する市民すら、否定的なイメージを書いてしまい、それは探訪記を読んでも修正されないのである。こうしてみると、ファミリエンホイザーの否定的なイメージは実態をとらえているというよりも、当時の市民層の思い込みから生じたものと考えたほうがよい。ベルリン市民においては、当時の労働者の住宅事情の現実の社会・経済上の背景は捨象され、かわりにこうした思い込みから道徳・衛生の側面が強調される。労働者に同情をもたない人がファミリエンホイザーを叙述すると、こうした思い込みの部分が肥大してしまうのである。また、ファミリエンホイザーがフォークトラントという「泥棒の隠れ家」とみられた地域に建っていたことも、こうしたイメージの形成に寄与したのであろう。

一住居に一家族と部屋ごとの機能分離が確立した住宅に住む市民には、それと対照的に大人数が詰めこまれ、一つの部屋が複数の用途で使われるファミリエンホイザーは理解できず、あってはならないものであったのだろう。そのため、市民層は現実を把握しないまま、自分たちの社会とはちがう世界という認識からファミリエンホイザーに様々なマイナス・イメージのレッテルをはったのである。こうしてみれば否定的な認識は市民層の価値観や居住習慣を強く反映したものといえる。

以上の指摘はさしあたって文章を残した者についていえるのだが、市民層の価値観を強く反映しているということから、このイメージが彼ら以外のかなりの市民層にも広く浸透していたとみてさしつかえない。

ファミリエンホイザーについての否定的な認識は一八四六年以降展開した住宅改革運動に受けつがれるが、最後にそれを確認しよう。

当時のドイツ最大の住宅改革組織であるベルリン共同建築協会の設立集会（一八四六年）では、次のようにのべられている。ファミリエンホイザーは矯正施設に似ている。そこでは無産・非教養市民が常にひしめきあって生活している。家族生活が破壊され、男女ならびに様々な年齢層の者が一緒に住むことで非道徳が促進され、労働意欲が失われる。ファミリエンホイザーには悪人が逃亡の地を求め、犯罪者の流入が避けられなくなる。[20]

ただ、一八六〇年代になるとベルリンで労働者用の大規模な集合住宅が増加したためか、[21] ファミリエンホイザーのような特定の建物が住宅改革者の間で問題とされることはなくなる。そうであっても労働者の悪住環境をかたる時にはファミリエンホイザーのイメージがそのまま使われる。当時最大の社会福祉団体である労働諸階級福祉中央協会の機関誌『労働者の友』の編集長K・ブレーマーは、西ヨーロッパの住宅協同組合を概観した論文で労働者の集合住宅を次のようにのべている。そこでは、多くの家族と個人が狭い、汚い空間に押しこめられるため家族の幸せが破壊され、かわりに不潔と無統制が支配するのである。[22]

註

（1）『国王に捧げる書』の反響は G.u.K., *a.a.O.*, S.236-243 参照。シュター

ルとシュトレックフスの著作は筆者未見。

(2) *Allgemeine Zeitung*, Augsburg, Nr.211, 30. 7. 1843. (G.u.K., *a.a.O.*, S.238.); Karl Gutzkow, Diese Kritik gehört Bettinen, in: *Telegraph für Deutschland*, Hamburg, Nr.165, 10, 1843. (G.u.K., *a.a.O.*, S.241f.)

(3) G.u.K., *a.a.O.*, S.249f.

(4) Heinrich Augst Brass, *Die Mysterien von Berlin*, Berlin 1844. (G.u.K., *a.a.O.*, S.265-267.)

(5) Luise Mühlbach, *Ein Roman im Berlin*, Berlin 1846. (G.u.K., *a.a.O.*, S.253-257.)

(6) Anonym, *Geheimnisse von Berlin. Aus den Papieren eines Berliner Kriminalbeamten*, Berlin 1844. (G.u.K., *a.a.O.*,S.250.)

(7) Ebenda. (G.u.K., *a.a.O.*, S.269-271.)

(8) Grunholzer (B.v.Arnim), a.a.O., S.535.

(9) Theodor Mundt, *Carmela oder die Wiedertaufe*, Hannover 1844. (G.u.K., *a.a.O.*, S.250-252.)

(10) 本稿では次の版によった。Ernst Dronke, *Berlin*, Frankfurt am Main 1846, Hg.von R.Nitsche, Darmstadt und Neuwied 1987. ファミリエンホイザーをあつかった箇所は G.u.K., *a.a.O.*, S.260-263 にも収録。

(11) *Ebenda*, S.260.

(12) Dronke, *a.a.O.*, S.116.

(13) *Ebenda*, S.116-119.

(14) *Ebenda*, S.121.

(15) Friedrich Sass, *Berlin in seiner neuesten Zeit und Entwicklung*, Leipzig 1846.

(16) *Ebenda*, S.335.

(17) Ruth Köhler und Wolfgang Richter (Hg.), *Berliner Leben 1806-1847. Erinnerungen und Berichte*, Berlin 1954, S.423.

(18) Sass, *a.a.O.*, S.6f. G.u.K., *a.a.O.*, S.260f. にも本稿で参照したテキストの一部が収録。

(19) G.u.K., *a.a.O.*, S.259f.

(20) Carl Wilhelm Hoffman, *Die Wohnungen der Arbeiter und Armen*, Berlin 1852, S.19-22. 他に Viktor Aimé Huber, *Die Wohnungsnoth der kleinen Leute in grossen Städte*, Leipzig 1857, S.36 など。

(21) Ribbe (Hg.), *a.a.O.*, S.665f.

(22) Karl Brämer, Ueber Häuserbau-Genossenschaften, in: *Der Arbeiterfreund*, 2, 1864, S.211.

おわりに

本稿の叙述を整理しよう。否定的なイメージとは異なるファミリエンホイザー像を提供するグルンホルツァーの探訪記発行後も、否定的なイメージは根強く、とくにドロンケのように労働者の状況に同情し、またグルンホルツァー探訪記にほぼ依拠してファミリエンホイザーを叙述した者ですら、否定的なイメージを書いてしまう。結局、ファミリエンホイザーの否定的なイメージは実態を捉えているとはいいがたく、ベルリンの市民層の思い込みから生じたステロタイプのイメージにすぎない。人口増大による大集合住宅の出現に当惑したベルリンの市民は、自分たちの頭のなかで「ファミリエンホイザー」という都市社会内の異空間を作りあげたのである。

したがって、以前明らかにした「無階級市民社会」をその根底とする当時の住宅改革構想は労働者の現実への理解にもとづいておらず、そのためその実効力が限定されてしまったといえる。当時の住宅改革運動のこうした問題は、当時の社会に運動を位置づける視点のない従来の研究ではとくに問題とされなかった。このことは「社会的住宅建

設」成立史の観点から一九世紀の住宅改革運動を叙述することの限界を示している。

さて、労働者住宅認識は都市化が本格化した世紀転換期には変化をみせる。一八六〇年代以降労働者用の大規模な集合住宅の数が急速に増加し、住宅問題が量的な面からも捉えられるようになる。そのため世紀転換期の住宅改革運動で悪住環境が問題になる時、それは社会政策学会のドイツ都市の住宅調査（一八八五年）の統計によってである。[1] 現実を把握しないまま、実態とちがうイメージを作りあげた世紀中葉の改革運動とはちがい、世紀転換期のそれは数字による正確な状況把握を試みたといえる。特定の建物が悪住環境の象徴に祭り上げられることはなくなるのである。

註

（1） Bullock. op.cit., p.65-70.

（新潟大学助手）

Die bürgerliche Gesellschaft und die "Familienhäuser" in Berlin in den 40er Jahren des 19. Jahrhunderts

Masafumi Kitamura

Die Wohnsituation der Berliner Unterschichten wurde in den 40er Jahren des 19. Jahrhunderts als soziales Problem erkannt. Das eklatanteste Beispiel für das Wohnungselend der untersten Schichten waren die "Familienhäuser". Das Berliner Bürgertum nannte die Familienhäuser "Pesthaus", "Mördergrube" usw. und ihre Bewohner "Gesindel" usw. Entsprachen diese negativen Vorstellungen der Realität der Familienhäuser? Das ist bisher fast völlig unerforscht.

Dafür wurde zunächst die Schrift "Erfahrungen eines jungen Schweizers im Voigtlande" von dem Schweizer Pädagogen Heinrich Grunholzer als Material ausgewählt. Diese Schrift ist das Besuchsprotokoll über die Familienhäuser und der Anhang zu dem 1843 erschienenen "Dies Buch gehört dem König" von Bettina von Arnim. Aus dieser Analyse sind die folgenden Tatsachen klar geworden.

1) Kein Haushalt nahm Fremde in Untermiete. Es gab viele Häushalte, deren Personenzahl sich aus verschiedensten Gründen reduzierte. Und Kinder, wenn sie älter als 12 Jahre waren, mußten auf eigenen Füßen stehen.

2) Die Bewohner lebten von der Hand in den Mund.

3) Die Bewohner standen zueinander in engen Beziehungen.

Diese Ergebnisse entsprechen nicht den negativen Vorstellungen von den Familienhäusern.

Welchen Einfluß hatte das Grunholzer-Protokoll auf die negativen Vorstellungen von den Familienhäusern? Ich habe diese Ergebnisse mit den bürgerlichen Beschreibungen der Familienhäuser ,vor allem dem 1846 erschienenen Buch "Berlin" von Ernst Dronke verglichen. Auch nach der Veröffentlichung des Grunholzer-Protokolls verschwanden die negativen Vorstellungen nicht.

Und Dronke benutzte als Quelle das Grunholzer-Protokoll, als er die Umstände in den Familienhäusern beschrieb. Aber sogar Dronke, der gegenüber den Bewohnern Mitleid empfand, thematisierte den moralischen Niedergang in den Familienhäusern. Also hatte auch er die negativen Vorstellungen von den Familienhäusern übernommen.

Aus dieser Analyse läßt sich schließen, daß die negativen Vorstellungen von den Familienhäusern auf Vorurteilen basierten.